

校長室から
(H30年度)

ひがしなら通心

茨木市立東奈良小学校 川上 隆 No. 53

平成31年2月8日(金)発行

心の鬼退治をしよう

立春の日(今年は2月4日)を過ぎ、暦の上では春になりましたが、まだ寒い日が続いています。運動と薄着を心がけ、しっかりと栄養を取って風を引かない健康な体を作りましょう。(立春の期間は、2/4～2/18の15日間です。暦上、立春の日から春が始まり、立夏5/6の前日までが春となります。)

さて、みなさんは節分(立春の日の前日、今年は2月3日)に豆まきをしましたか。「鬼(おに)は～外、福は～内」と豆まきをして、恵方巻きを食べるのが節分の定番となっていますね。この「鬼」ですが、桃太郎や、一寸法師などの物語では悪い鬼を退治します。でも、浜田廣介の『泣いた赤おに』や、あまんきみこの『おにたのぼうし』では、心優しい鬼の姿が描かれています。

『泣いた赤おに』は、赤おにが村人と友だちになるために青おにがわざと悪者を演じます。おかげで赤おには村人と仲良くなれ楽しく過ごすことができました。しかし、青おには、赤おにが自分と一緒にいると悪いおにと思われるから、と家を出ていってしまいました。赤おには「どこまでも きみの ともだち あおおに」という書き置きを見て、悲しみがこみ上げ、涙を流します。

『おにたのぼうし』は、豆をまかれて雪の道に逃げ出したおにだが、貧乏で豆も買えない、女の子と病気のお母さんが住むおうちに、古い帽子で角(つの)を隠しごちそうを届けます。でも、「お母さんの病気が治らないのは豆まきをしていないからだ」と言われたおにたは、女の子に嫌われたのだと悲しみ、帽子の中に豆を入れ、女の子の家に届けて姿を消しました。…というお話です。



おにたの「おににも、いろいろ あるのにな。にんげんも、いろいろ いるみたいに」という言葉が胸に刺さります。『泣いた赤おに』や『おにたのぼうし』などの物語を読んで、寒い寒い夜に、優しい鬼もいるかもしれないのに、みんなで追い払おうとするから、その鬼はまた違う家に行って悪さをすると、考えた子がいました。みんなが仲良くすれば、「福は内」と言わなくても、良いことは向こうからやってくるんだよ…と。

確かに鬼は、人の嫌な心や弱い心を表した姿かもしれませんね。自分の中の「心の鬼退治」を心がけ、友だちを大切にしたい楽しい学校生活にしましょう。

家庭に欠かせない五つの力

～ある雑誌より～

<1. 愛の力>

家庭は親から子に愛情が注がれる場所です。ただし、それは子どもの言うことを何でも聞き、世話を焼くことではありません。また、勉強や遊び、友達関係まで、子どもの生活全般について親が方法を示し、「こうしなさい」と強制することでもありません。過保護や過干渉は、子どもの自立を妨げます。いつも家庭に会話があり、笑いがある。誰かに良いことがあれば、みんなで喜び、悲しみも共有する。こんな日常が子どもの安定した心理状態を育てます。

<2. 経済の力>

衣食住全ての面で子どもの通常の生活が保障され、学校にも通える。家庭はこうした「健康で文化的な最低限度の生活」を子どもに提供する場です。そのために親は働いてお金を稼ぎます。

<3. しつけの力>

教室で筆記用具を机上に散乱させている児童を注意したら、「誰にも迷惑かけてない」と反論されたことがあります。「片付けるとすっきりして気持ちよいでしょう」と言っても、きょとんとしていました。こうした子が増えています。「清潔で整理された状態は快い」という感覚はしつけの中で育つものです。衛生の観念以外にも、自分の健康管理や公共のマナー、他者との交わり方など、しつけの領域は多様です。そうした礼儀作法や規範を教え、身につけさせる場所が家庭です。

<4. 文化の力>

親子のふれあいこそ「家庭の文化」です。時には、親が子に絵本を読み聞かせたり、趣味を楽しむ姿を見せたりするのも良いでしょう。しかし、最も簡単な文化活動は家族の団らんであり会話です。その内容も日常の出来事に対する喜怒哀楽のやり取りで十分です。子どもは親との会話を通して物事のとらえ方や未知の世界を知り、自分の価値観を創っていきます。

<5. 人格の力>

親にたたかれて育った子は、他者に対して暴力的に接しがちです。親が常に相手を見下す言動をすれば、子どもは差別に違和感を持たなくなります。負の面だけでなく、親の肯定的な言動も子どもの性格や行動に良い影響を与えます。子どもは親をまねて育つからです。「嘘をつくな」「弱者をいじめな」など、子どもに言う決まり文句がある。親がいつも地道に仕事に励んでいる。親同士が仲が良く、互いにいたわりあう。こうした飾らない親の姿を示せば良いのではないのでしょうか。

